

集団の記憶、個人の記憶

第四回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」

会期：2016年10月28日(金)―30日(日)

会場：名古屋大学、博物館明治村

尹 芷 汐



近年、東アジア諸地域の政治的緊張に伴い、新たなナショナル・メモリーの編集作業が活発に行われるようになっていく。一方、植民地主義、第二次世界大戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争など、20世紀を形作った出来事の数々は、簡単に記憶から抹消することも美化することもできない。経験的記憶の主体すなわち戦争当事者の数が減少しつつある一方、人文学研究はむしろ、負の遺産をどう受け継ぐかについて真剣に議論するようになっていく。

2016年10月28日から30日まで名古屋大学において開催された第四回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」が、「集団の記憶、個人の記憶」をテーマとしたのも、こうした状況が背景にあった。

このフォーラムは、日本語文学を通して東アジアの近代を考えるという発想から始まり、2013年から韓国、中国、台湾、日本を巡回しながら行われてきた。機関誌『越境—日本語文学研究』は年に一度発行され、各国・地域から原稿を募集している。「越境」とは、創刊の辞に書かれたように、「越境」つまり境界線のどちらかの側に立って行き来するのとは違い、「それぞれの局地性や立場を無視することなく、そこに一つの足場を置きつつも、さまざまな〈境〉の向こうに他方の足を伸ばすこと」である¹。

また、「日本語文学」という概念は、もともと在日朝鮮人文学のディアスポラ性を強調するために使用された言葉だったが²、最近の文学研究ではリービ英雄、楊逸、多和田葉子、温又柔など、多言語性を持つ越境作家に対しても用いられている。本フォーラムは、戦前から現代までの、国や民族、言語の境界線、そして植民地時代やグローバル化時代の様々なコンタクト・ゾーンのあり方を問題化する文学を、まとめて一旦「日本語文学」と見なしている。それで在日朝鮮人の文学に特化した「日本語文学」の歴史性が見えづらくなるおそれもあるが、過去に見えてこなかった、近代東アジアにおける日本語という媒体の様々な意味を、改めて浮上させることが可能になる。

第四回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」

フォーラム大会の第一回は「東アジアにおける日本語雑誌と植民地文学」(韓国高麗大学校)、第二回は「大衆化社会と日本語文学」(中国北京師範大学)、第三回は「文化翻訳／翻訳文化」(台湾輔仁大学)がテーマだった。第四回名古屋大会の「集団の記憶、個人の記憶」というテーマは、以上の三つを踏襲しているといえよう。なぜなら、言い換えれば第一回は戦前日本の植民地開拓に関する記憶のメディア、第二回は記憶する主体、第三回は記憶する言語が議論の中心だったからである。

第四回のフォーラムの大会は、【記憶×植民地】、【記憶×戦争】、【さまざまな記憶】という三つのセクションを設け、台湾、韓国、中国、日本の各地からの発表者が登壇した。

【記憶×植民地】において、近代日本の文豪たちの植民地記憶が扱われている。蘇峰の旅行記に記録された日本の植民地建設が、いかに今日の台湾にその影を落としているのか(黄翠娥)。満州外遊にしたがって、漱石の満州記憶がいかに「想像」と「想起」の間で構築されたものか(范淑文)。佐藤春夫のテキストにおける対話性が、いかに植民地記憶に不特定多数の視点を与えたのか(李征)。日本近代文学の中心に位置するこれらの作家について事例分析を行うのは、同時に文学のカノンにおける「植民地記憶」の構築を考えることにもなる。加えて、巖仁卿は植民地時代の在朝日本人たちがいかに「歌集」という媒体を通して、京城という歴史的空間を記憶し共有しているかを示している。

以上の発表で取りあげられたのは、戦前植民地の光景を同時代に描いたテキストであるのに対して、【記憶×戦争】のセクションでは、戦後における戦争の記憶化に焦点が絞られた。戦後日本の出版文化と絡ませながら、林芙美子『放浪記』における〈帝都・モダン〉の記憶を捉え直す発表(波瀾剛)、あまぎみこのテキストにおける引き揚げ

者の満州記憶と、それに内包された差別性を指摘する発表(林濤)、ディアスポラ文学『火山島』がいかに文化混淆視点によって、強く保たれてきた韓国の民族純血主義を克服しえるかを主張する発表(金煥基)、という三つは具体的な事例研究である。一方、全体図を見渡すものとして、鄭炳浩は戦後韓国の文学史・研究史における「植民地文学」の語り方について網羅的に整理し、成田龍一は「戦後」を「記憶の場」として捉え、戦争文学のアンソロジー・戦争映画・リメイクの歴史的沿革、その傾向を提示している。これらの発表を通して、「戦争の記憶」は、戦後の作家・表象・メディア・体制の間で実に多様な力学関係が働きかけ合う、緊張感の満ちた磁場としてその正体を表した。

【さまざまな記憶】は、文壇周縁に置かれた作家たちの「純文学」と「文学運動」への記憶を示した発表(和泉司)、直木賞作品・東山彰良『流』から、台湾半島における「分裂」の記憶を乗り越えるものを読もうと試みた発表(坂元さおり)、「新京」(長春)に対する日本文学者の記憶を考察した発表(劉春英)が行われた。「新京」の問題は【記憶×植民地】でなく【さまざまな記憶】に入っていることが興味深い。満州を植民地と見なすかどうか、日中の歴史学ではまだ意見が一致していないからなのか。これはまさに記憶の構築に葛藤が起きる瞬間ではないかと思わせるプログラムだった。

境界を跨いだ成果、今後の展望

フォーラムの成果として、まずは知的枠組の差異を認識する場を提供したことが挙げられるであろう。日本、韓国、中国、台湾の日本研究者たちが、戦争や植民地の記憶を考える際、対象や枠組に様々なズレが生じる。例えばコメントーターの王志松は、なぜ「戦後」や「ベトナム戦争」といった概念がたやすく用いられているのか、と鋭く指摘している。東アジア各国において「戦後」の指す時間性が異なるし、「ベトナム戦争」という語だと中国では「中越戦争」を指している。こうした概念と枠組のズレがある限り、近代東アジアの記憶を一つで共有しようとするのが暴力的である。差異をなくすのではなく、感情としての記憶を相対化し、学問的な論理に基づきながら記憶の媒体(言葉、視覚メディアなど)を再認識・再構築し、差異を共有した上で地域間の持続的な交流を深め、知的遺産と人的ネットワークを次世代に継承していくことこそ重要だ、ということが発表者たちの間で何度も確認された。

もう一つは、さまざまな言語的・文化的背景を持つ研究者が「日本語文学」を読んで議論することの可能性が見えてきたことである。例えば李征と林濤は、佐藤春夫のテキストに登場する『女誠』というテキストの意味と、あまきみこの小説に出てきた「愛蓮」という名前の意味を追求し、そうした表現に仕込まれたメタファーを読み取っている。それはまさに日中両言語を使用し、両方の文学史をも熟知した研究者だからこそ気づき得る視点だった。

しかし、フォーラムにはいろいろな課題も残されている。まず、「跨境」を目的として開かれたこのフォーラムは、同時に別の境界線を設けることによって、何かを遮断しているのではないか。「東アジア」という地域概念はどれだけ有効だろうか。たとえば、情動的・物理的な限界によるものだが、議論において北朝鮮の存在が明らかに欠如しているし、戦後アジアの記憶に深い影を落としたベトナム戦争への目配りも見られない。そして、フォーラムで取りあげられたのはほとんど日本人作家のテキストだが、「日本語文学」にはまだ、今回議論に上がらなかった、様々な「他者」が存在するはずである。

それから、いかに理論と接続するかの問題もある。フォーラムの中で、たとえば鄭炳浩と成田龍一の網羅的な論説は、ビエール・ノラ「記憶の場」理論の、日韓の戦後問題における実践だといえよう。だが、多くの発表では「記憶」という概念の捉え方が明確でなく、そのため同じセッションでも各論者の問題意識と方向性がかなりずれており、「記憶」のどんな側面を議論しているかが、曖昧だと感じられる





ことを予感させられるような、活気あふれた集会だった。この東アジアの歴史・文化をめぐって、地域間・世代間で同時に行われた知的対話は、今後も各地域の若手研究者によって継承され、展開されていくことになるだろう。

明治村を歩く、記憶を紡ぐ

フォーラムの最終日に、ユニークな計画が一つ実行された。明治時代の建築物を収蔵した犬山市博物館明治村にある、旧制第四高校の教室が

フォーラムの会場となった。記憶装置の内側に入って記憶を考えるという独特な設定の中で、参加者たちは不思議さを味わいながら、議論を続けた。集会の後、自由に明治村の中を散歩する時間が用意され、参加者たちは選り取りの古い建物の間を移動しながら、明治日本の空間に思いを馳せ、そこでまた新たな記憶を持っただろう。会議後、明治文学の専門家はすぐに夏目漱石・森鷗外邸へ向かい、移民研究に関心ある者はブラジル日系移民住宅に足を運ぶ。赤煉瓦の帝国ホテル玄関に感心する人もいれば、金沢監獄の内側に入って、パノプティコンを体験してひやひやする人もいる。違う見学コースによって、参加者はみな異なる記憶を紡いでいる。その記憶はきわめて個人的なものでもあり、きわめて集団的なものでもある。明治村の記憶、これも「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」が残した大きな成果である。

こともあった。また、コメンテーターの安川晴基が指摘した通り、「記憶」つまり「想起された過去」のフレームを分析する時、記憶の創出（誰が、何を、どこで、いつ、どのように、誰に宛てて想起しているか）と、記憶の受容史（誰のどんな過去が、誰によって選択され、どう評価されたか）という二つのフレームがある³。具体的に提示されたそれぞれの作家や作品について、記憶の主体は何か、どのようなコンテキストに、いかに位置づけるかについて、まだ検証する余地が大きいと思われた。

世代間の「跨境」

フォーラムのもう一つの目標は、大学院生やポストドクター等の若手研究者を育成するということである。大会前の10月28日には「東アジアと日本語文学一次世代フォーラム」という場が設けられ、明治期、戦前期、戦後という時代設定にしたがい、三つの会場で、各地域の大学院生が発表を行った。近代日本の海洋国家思想の起源（本多利明）、日本近代文学と古典文学の連続性及び東アジアへの接続（曲亭馬琴、黒岩涙香などの文学を例に）、戦前東アジアにおける作家（阿部知二など）と日本語文学テキストの移動、戦後における戦争「記憶」の構築と齟齬（例えば疎開や慰安婦問題）、現代文学から見た東アジアの帝國的な社会構造（例えば桐野夏生と小林多喜二の共通性、女性労働ルポルタージュ）など、多種多様な角度から、日本語文学と近代東アジアの地域・地域間文化及び記憶の形成との関係性が検討された。近い将来、多国籍の研究者による共同研究が日本近代文学研究の主流になる、という

1 | 『跨境—日本語文学研究』については、小泉京美のレビューを参照することができる。小泉京美「〈越境〉から〈跨境〉へ—東アジアと同時代日本語文学フォーラム×高麗大学校日本研究センター編『跨境—日本語文学研究』」『JunCture—超域的日本文化研究』第6号、2015年3月、pp.202–204。

2 | 金石範「『日本語文学』と歴史性」『跨境—日本語文学研究』第2号、p.4。

3 | 記憶論に関しては、アルヴァックスの「集合的記憶」、ピエール・ノラの「記憶の場」、アライダ・アスマンとヤン・アスマンの「文化的記憶」という三つのモデルがあげられる。また、いずれのモデルも安川晴基の論考でまとめられている。安川晴基「『記憶』と『歴史』—集合的記憶論における一つのトポス」『藝文研究』第94号、2008年6月、pp.299–282。